



TITLE:

<地球をあるく> 日本の不思議

AUTHOR(S):

カオ, タン フエン

CITATION:

カオ, タン フエン. <地球をあるく> 日本の不思議. 資本と地域 2016, 11: 63-63

ISSUE DATE:

2016-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/215996>

RIGHT:

いる。

90年代以降労働分野での規制緩和が進み、長期にわたる賃金抑制政策がとられていたが、労働者の再生産が困難になってきている。それに対して、13章は「スウェーデン・モデル」と呼ばれるスウェーデンの労働市場政策と労使関係を紹介している。そのモデルを要約すると、流動な労働市場、失業者に対する公的手厚いセーフティーネット、労使の自治による労働市場のガバナンスである。輸出産業全体の競争力を維持するという点で労使が妥協するというのがこのモデルの基盤である。

14章は、コミュニティの復権を歴史的意義、資本主義との関係、解体後の再構築の三つの角度から分析している。そして今後再構築のために、市場の

＜地球をあらく＞

日本の不思議

カオ・タン・フエン

日本の地に初めて足を踏んだのは18歳のときだった。毎日は新しい旅のようで、新たな出会いと新たな発見が溢れていた。日本での生活は思ったよりも同じアジアの国であるベトナムとは全く違う生活だった。その中で日本についての不思議をいくつか紹介する。

日本の不思議 - その1:

街のことを語り続けるマンホール

初めてマンホールのことを気づいたのは仙台市を訪ねた時だった。華やかに色づく紅葉の下に隠れていたのは市の花のハギや市章のデザインによるマンホールだった。そこで日本各地をめぐり、マンホールのデザインを写真で納める年配のご夫婦と出会い、仙台の市章の話を目にした。それは、伊達家が古くから使っていた三ツ引両の紋章、そして仙台市の「仙」の字のもとでデザインされていることだった。この出会いをきっかけにして旅する度に各地に存在しているデザインマンホールを観るようになった。世界にもデザインマンホールがあるが、日本のように多くは存在していない。単なるマンホールだと思われがちだが、日本ではその町の歴史や文化を語ってくれる芸術的なものであり、その町の印でも

仕組みの活用、資本運動の規制、顔の見える縁を作ること、経済成長イデオロギーの放棄という4つの条件が指摘されている。

本書は、現代資本主義の特徴を主要な産業部門において独占的な大企業が資本蓄積を主導していることと、多国籍企業によるグローバルに経済活動という2点に集約して、国民経済の様々な面での具現化を紹介した。マルクスが提出した資本蓄積の二側面、すなわち貨幣資本蓄積と現実資本蓄積の関係性をベースに、現代資本主義の新形態での投影を新たな理論的観点にまとめた挑戦的な一冊であると言える。

(京都大学大学院経済学研究科 後期博士課程)

ある。旅をするときに、どこから旅をすればいいのか、何をお土産として買えばいいのかを悩んだとき、旅人の私に様々なヒントを与えてくれるのは普段気づかなかった小さなマンホールだ。

日本の不思議 - その2:

エリートの野菜と売れない野菜

私は日本のスーパーで買い物するときに疑問を思ったのは、なぜ日本の野菜は同じ形をしているのかだった。私は農村で育ち、野菜たちに囲まれて住んでいたため、形やサイズが同じ野菜を見てあり得ないことだと不思議に思っていた。大学のときに農家を訪問する機会が何度かあった。そのとき、農家たちから聞かれたのは「日本人は不思議に見た目の良い野菜しか買わないんだよね」という話だった。つまり、野菜の中のエリートだ。確かにスーパーで並んでいる野菜たちはいい形をしていて値段を決めるのも、箱に入れるのも便利だが、不揃いな野菜はどこに行くのだろうか？一般的に市場に出ることなく、農家で消費するか・直売所で販売するか・加工用のために消費するか・廃棄するかという選択になるのだろう。食料自給率が低いと言い続ける日本でこんな事実があるとは信じがたいことだった。

日本での暮らしは毎日私に多くの発見をもたらしてくれる。素晴らしいことも、そうではないことであるが、一つ一つが大切な体験であり、この国だけでなく、自分の国を理解するきっかけになっている。

(京都大学大学院経済学研究科 修士課程)